

ヤマネコは見ていた

アルキ・ゼイ作 掛川恭子訳



岩波書店

991 ゼイ，アルキ

ヤマネコは見ていた

アルキ・ゼイ作，掛川恭子訳

岩波書店 1970

266p 23cm (岩波少年少女の本 13) 小学4,5年以上

(参考) Zei, Alki : Wildcat Under Glass, 1963

岩波少年少女の本 13

■ ヤマネコは見ていた

定価七〇〇円

一九七〇年十月二十日 第一刷発行 ©

訳者 掛川恭子

絵 荻太郎

発行者 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

岩波雄二郎

印刷者 長野市中御所二ノ三〇 田中忠

発行所 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

株式会社岩波書店

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

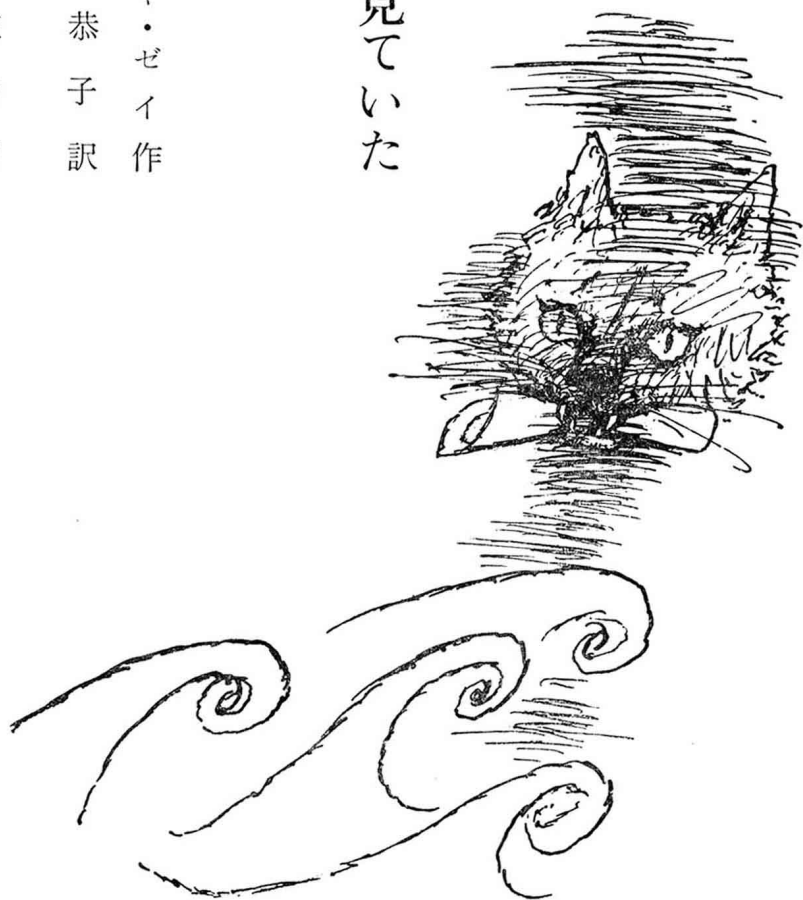
製本 株式会社松岳社

表紙・見返・箱印刷 錦印刷株式会社

ヤマネコは見ていた

アルキ・ゼイ 作
掛川 恭子 訳

岩波書店



WILDCAT UNDER GLASS

by Alki Zei

1962

English translation copyright © 1968 by Edward Fenton.

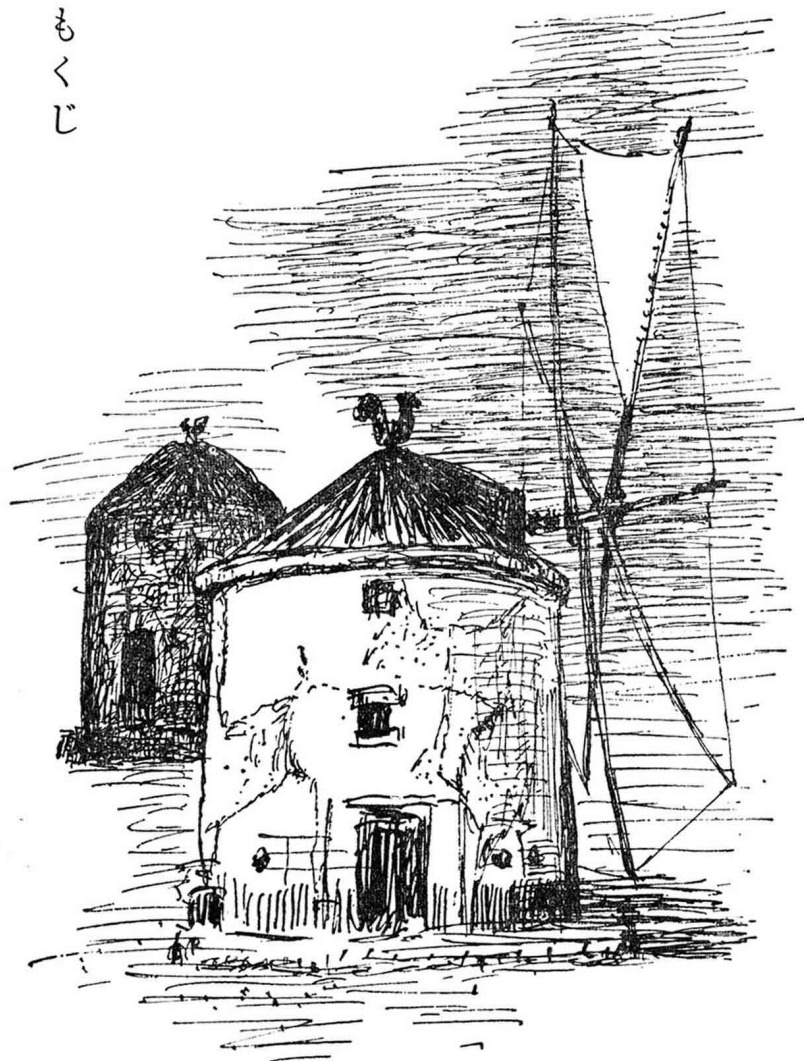
First published in Greek by Editions "Themelio" under
the title "To Kaplani tis Vitrinas."

Copyright © 1963 by Alki Zei.

Maps Copyright © 1968 by Holt, Rinehart and Winston, Inc.

This book is published in Japan by arrangement
with Holt, Rinehart and Winston, Inc., New York
through Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo.

もくじ



物語のまえに……9

第一部 だいいぶ ラマガリの夏

1 たいくつな日曜日……13
にちようび

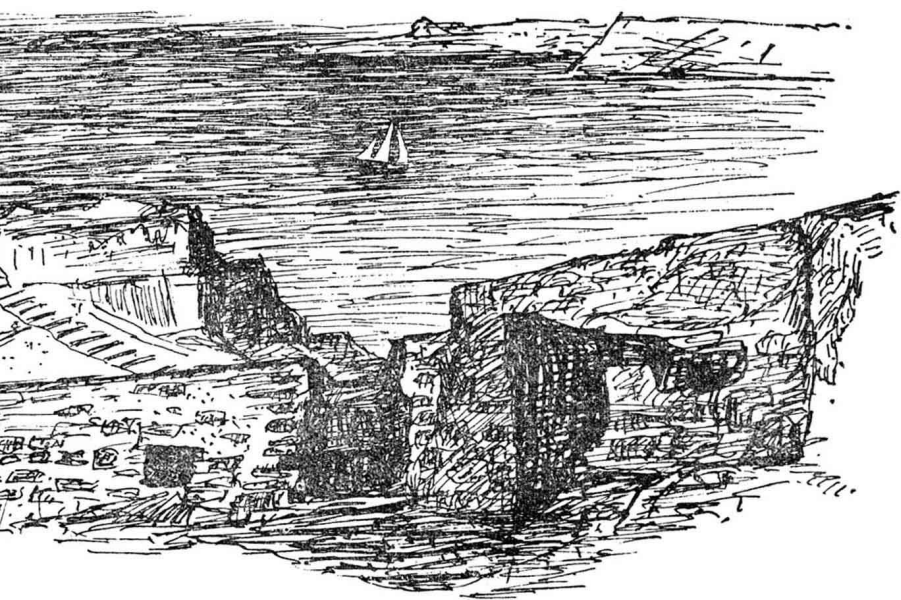
2 木曜日はお客さまのくる日……25
もくようび きやく

3 ラマガリへ……41

4 ニコの到着……54
とうちやく

5 裏切り者……87
うらぎりもの

6 一枚ばねの風車の秘密……106
まいばねふうしや ひみつ



第二部 ^{だいぶ} ニコの門出 ^{かどで}

1 アレクシス……159

2 アンゼリキおぼさんの店……187
^{みせ}

3 有害な本……205
^{ゆうがい}

4 ミルトの《てから》……223

5 カナリアとスペイン……250

訳者あとがき……263
^{やくしゃ}



ヤマネコは見ていた

萩 掛 ア
川 ル
太 キ・
恭 ゼ
郎 子 イ
絵 訳 作

物語のまえに

ギリシアは古代文明発祥の地です。アクロポリスの丘に象徴されるすぐれた文化は、古代ローマ、中期イタリアのルネッサンスで花開き、近代ヨーロッパ文明へとひきつがれました。そして、オリンピック大会——オリュンポスの神々に捧げられた祭典——は、いまもわたしたちに伝えられています。

紀元前すでに、精神および肉体の文化を、最高の次元にまで高めていた、この古代ギリシアの繁栄は、残念ながら、その後のギリシアの歴史では、二度とふたたび、くりかえされることはありませんでした。

ギリシアの領土はせまく、土地はやせていて、国民はいつもひどく貧しいくらしをしてきました。美しいが貧しい自然にくわえて、ギリシアはたえず外国の支配をうけてきました。この物語でもふれているトルコによる支配は、十五世紀なかばから、十九世紀初頭におよぶ長い間つづきました。やっと独立したと思ったのもつかのま、こんどはヒットラーにひきいられたナチス・ドイツにより、第二次世界大戦がおわるまで占領されていました。

メリッサがヤマネコから手紙をうけとったのは、この大戦直前のことです。人間が自由に考

え、行動する権利をうばおうとしたナチスの手は、平和だったメリツサの家族の心をはなれなれにし、ニコをうばっていきしました。

しかし、ニコのたたかいは、はじまったばかりだったのです。大戦がおわって解放されたのも、ギリシアの空は晴れませんでした。国の中ではげしい勢力争いがくりかえされ、一九六七年、軍部一派がクーデターで政権をにぎりしました。軍隊をささえるものは力です。軍事政府は、力によって、国民の考え方まで支配しようとしているのです。

けれど、ギリシア人たちは、祖先のうみだした精神文化の遺産——自由を愛するきもち——を、失ってしまったわけではありません。いまでも大勢のメリツサが、大勢のニコが、自由をもとめてたたかっています。このヤマネコの物語は、けっしてむかし話ではないのです。ギリシア政府はこの本の出版を禁止しましたが、それがなぜかは、すぐにおわかりになるでしょう。

訳

者

第一^{だいいち} 部^ぶ

ラ
マ
ガ
リ
の
夏



1 たいくつな日曜日 にちようび

冬の日曜日にちようびくらいつまらない日はありません。世界せかいじゅうの子どもたちも、やっぱりわたしとミルトのようになりたいくつしているのでしょうか。早くから暗くらくなってしまつて、家の中になくってはならないのに、なにをしていいかわからないような午後ごごなんかはおおきく・ロンドンロンドンの書いたもの。でも、もうなんにも、ほんとうになんにもすることがなくなつてしまいました。

パパとママは、いつもの日曜日にちようびの午後ごごのように、ペリクレスさんの家にトランプをしにでかけました。ペリクレスさんは、パパの働はたらいている銀行ぎんこうの頭取とうどりです。おじいさまの妹いもうとのデスビーナ大おばさまは、友だちにあいにいってしまいました。女中じよちゆうのスタマティーナは休みをとりました。ですから、今夜家こんやにい

るのは、いつもの日曜日にちようびのように、わたしとミルトとおじいさまの三人だけです。お天気がいいときは、いつもおじいさまが散歩さんぽにつれていってくれて、暗くらくなってからかえってくるのです。やりきれなくらいたいくつになるのは、そのときからです。おじいさまは《古典こてん》といっしょに、書斎しよさいにとじこもってしまします。ミルトとわたしは、おじいさまの本のことをそうよんでいます。だって、その本はわたしたちがいま使つかっているギリシア語ギリジとはぜんぜんちがう、古いギリシア語ギリジで書いてあるからです。

ミルトとわたしはガラスがこいのあるポーチにでて、海をながめました。強い風つよにふかれて岩いわにあたっただけの波なみが、しぶきになって窓まどにかかり、しずくが窓ガラスをつたって落ちました。まるで涙なみだのようでした。それで、わたしたちは、「パパの死し」とか、「デイビッド・コッパーフイルドの養父ようふよりも」といじわるな、わたしたちの養父ようふなんていう、とびきり悲かなしい話を考えました。

それから、わたしたちは、寒さむさの中でぼろをまとい、あわれなこじきのおじいさまといっしょに、家から家へ、パンをもらいに歩あるいているという遊びあそびをしました。

でも、その日曜日にちようびにかぎって、とにかくすぐたいくつしていたので、ミルトは、「こじきのおじいさまごっこ」だなんて、まったくばかげているといいました。わたしたちはしばらくの間あいだ、ふくれっ面つらですわっていました。それから、じぶんのすきな窓ガラスを一枚まいえらんで、しずくがおおくかかったほうが勝ちかちという遊びあそびをしました。でも、いつもわたしのほうが勝かつたので、ミルトはこんなばかみたいな遊びあそびはしたことがないといいました。

それで、わたしがいいました。「じゃ、ヤマネコのお話をしない？」

まだぜんぶいいおわらないうちに、わたしはそんなこといわなければよかったと思いました。わたしはぞっとしました。

「ばっかみたい！ あきれてものがいいえないわ！」ミルトがすごいけんまくでいいました。「メリアったら、ほんとにうぬぼれてるのね。ヤマネコのお話ができるつもりでいるなんて！」

そう、たしかにミルトのいうとおりです。だって、広い客間に、ガラスケースにいられておいてあるはく製のヤマネコの話ができるのは、いとこのニコだけなんですから。ニコはアテネの大学で、化学の勉強をしています。毎年、夏になると、わたしたちがすんでいる島にやってきて、わたしたちといっしょにいなかにくのです。ニコはわたしたちにヤマネコの冒険の話を、いっぱいしてくれまう。わたしたちだけにでなく、いなかで友だちになった村の子どもたちにもきかせてくれます。

デスピーナ大おばさまのお得意の話によると、そのヤマネコは、この島のヒツジをたべに対岸のトルコから泳いできたところを、大おばさまのご主人に殺されたのだそうです。でも、それはおとなむきの話で、そんな話を信じる子どもはひとりもいません。ニコは大おばさまとはちがいます。ニコはケースの中のヤマネコについて、ふしぎな話をたくさん知っていますのです。その話はけっしておわらないで、どこまでもどこまでもつづきます。毎年、夏になると、ニコは、まえの年の夏におわったところから、その話のつづきをはじめました。